

日本の里山のむこうにアマゾンを見つめながら フリーライター 下郷さとみ

10月のはじめ。3人の日本のビザを申請するのに必要な書類をコリーデまで受け取りに行った時のこと。コリーデはシンガー・インディオ国立公園の近隣に位置する、ベポーが11歳の時から暮らす町です。空港のある別の町からタクシーで向かった160キロの道のりには、延々と360度、水平線まで続く広大な畑が広がっていました。若いタクシードライバーは、大豆やトウモロコシ、綿花の大規模プランテーションによって発展したこの地域の歴史を誇らしげに語ってくれました。アマゾンのジャングルを切り開いてできたこの地域の歴史は、たったの30数年しかありません。

「どんどん投資が集まって、人も増えて、これからもどんどん発展して行くわ」
話を耳を傾けながら、住む人が「輝く明るい未来」を屈託なく信じるこの地の若さとエネルギーが、まぶしく思えてなりませんでした。けれど、その「輝く未来の大地」は、かつてそこにあった森や生き物やインディオの人々の暮らしの犠牲の上に立っています。そして、いま地球上にあるどの町も、かつてあった自然や伝統的な暮らしを壊して発展してきたものではなかったでしょうか。

私は9年前に東京を離れ、農的な暮らしを求めて千葉県 of 南のはずれの里山に移住しました。もはや耕作する人もない荒れ果てた棚田が広がる過疎の農村で暮らす中で、東京にいたころは気づくこともなかったことがたくさん見えてきました。――必ずどこかのだれかの犠牲の上に、わたしたちの暮らしは成り立っている。

RFJの会員になって20年以上になりますが、南房総の里山に越してはじめて、アマゾンの大切さが自分の肚の中にすっきりと落ちてきました。近所のお年寄りに教わりながら1枚1枚耕す荒れた棚田の向こうに、ひとつなかりに、アマゾンの「いま」が見える気がしてなりません。

ラオーニ長老は今回もまた、自分たちの暮らしを守りたいと、切々と訴えていました。幸せに暮らしたいと、この地球上のだれもが願って生きている。ラオーニたちも、わたしたちも。ただ幸せを願って来ただけのはずなのに、なにかが間違ってしまった。遠いアマゾンで起きている問題は、まさにわたしたち自身の問題だと、あらためて深く感じたラオーニたちとの旅でした。



旅は終わり、また始まる RFJスタッフ白石絢子

ラオーニの暮らすメトゥティレ村から関空までの距離およそ21,700km。日本での滞在期間17日、講演会12回、訪れた都道府県5つ、国内の移動距離は約2,200km。今回の旅の彼らの総移動距離は約45,600km!赤道の長さが約4万kmだそうですから…。数字を並べただけでてんやわんやの連続、奇跡的であった旅をご想像頂けるかと思います。しかし、ラオーニらにとってそんなことはどこ吹く風、常に堂々としていた3人の姿がいらして下さった皆様の記憶に刻まれているのではないのでしょうか。私は広島と東京の講演会のみ同行しました。カヤポ族と講演会を重ねるごとに会場の皆さんが作り出すその場の濃い空気を吸って、胸がいっぱいになりました。しかし、講演を終えるごとにアマゾンの森林破壊はこれで止ったわけではないという焦燥感も生まれました。彼らの言葉を聞くといつも「今」に引き戻され、そこからいつも始まるような気持ちになります。

私たちは未来のことばかりに囚われているわりに、次世代に渡す地球の姿を全く考えていません。ラオーニが彼の畑で食べ物の種を植えながら言いました。「この種は孫たちのために植える。私が植えなければ、一体誰が植えるというのだ?」生きているうちにできることは限られています。カヤポ族との出会いが、ゴールではなく皆さんの何かの始まりになれば幸いです。今日という日はかけがえのない一瞬のかたまり。感謝の気持ちを込めて、私も皆さんと共に歩んでいきたいです。ありがとう、そして今後ともどうぞ宜しくお願い致します。



おおきな家族と共に RFJスタッフ 建守麻奈

私が初めてラオーニに会ったのが7年前。この時は東京でご飯係としてお手伝いをしましたが、今回は関西空港で彼らをお出迎えし羽田空港でお見送りをするまで、全日程に同行させてもらいました。関空に着いて間もなく『お腹が空いた』とのことで、何とか見つけたオムライス屋さんでお腹を満たす。ラオーニは7年前と変わらない食欲、ブライリもベッポーも食欲旺盛。いよいよ旅が始まるなぁと彼らを見ながらワクワクした瞬間でもあり、緊張が増した瞬間でもありました。

休む間もなく各地を動きましたが、どこであろうと彼らはマイペースに時間を過ごしていた姿にはホッと、感心しきり。

講演会となればシャキッと目つきも鋭くなり、まさに森の戦士達という凛々しい姿になります。一度プライベートの時間となると、ラオーニはちょっかいを出しては「へへへ!」とお茶目に笑い、子供を見てはお爺ちゃんの優しい顔になり、ブライリは静かに佇んで暖かく皆を見守り、ご飯食べてお腹いっぱいになると満面の笑みになる。ベッポーは二十歳の少年の顔になり、何がそんなに?と思う位に笑いこけたり、小学生達と生き生きと走り回ってサッカーをしたり。普段の彼らはどこに居たって自然なのです。でも、彼らの住む場所、置かれている状況は変わらずに厳しい。「森を守ることは自分たちの住む地球を守る事になる」7年前も同じ事を訴えていました。講演が終わる度に変わらない現状を突きつけられ、胸が締め付けられ目頭を熱くしました。彼らはずっと戦い続け、そして形が変わりながらも次世代に引き継がれ戦っていく。私たちは現状を発信し、そして共有していかなければならないと感じました。地球の裏側に居る大きな家族の為に。

最後に、この貴重な時間を与えてくれた研子さん、東京のスタッフ、各支部のスタッフ、家族には心から感謝致します。本当にありがとうございました。



僕ら日本人とは異なる言語をしゃべり、文字も持たないという人達。日本の反対側のアマゾンからやって来た3人のインディオと全行程を共にした17日間。今回ラオーニ長老から、僕は「チョチュール」というカヤゴ族の名前をもらった。名前がつくまでは何となくキョリ感のあったインディオ達だったが、部族の言葉だと呼びやすいのか「チョチュール、チョチュール」と大声で叫ぶ。胸板は僕の倍以上もあるガッシリとした体格で、風貌は時代劇に登場するキリリとした武士の様な中年インディオ、名前は「ブライリ」。何を気いつてくれたのか彼は「隣に座れ、チョチュール」「トイレは何処だチョチュール」と何かにつけてチョチュールを連発する。

はためにはいい年をした大人同士だが、まるで小学生か中学生の呼び合いのようだ。なんて素朴でストレートなんだ。こちらの返事は「モイナ」カヤゴ語で頭のモにアクセントがある。「チョチュール」〜「モイナ」何度このやりとりをしたことだろうか。帰国の羽田空港で肩を抱き合いお別れのハグをした時には、最初の頃を感じたキョリ感はどこかに消えていた。

遠いアマゾンと繋がったような気がした。アマゾンの村に戻っての生活が、今まで同様に平和であるように祈るばかりだ。



アマゾンの風が吹いた3日間！

RFJしずおか代表 小林良恵

その風はとても力強く、そしてどこまでも優しい風でした。強靱な身体と優しい目のラオーニ氏は90代半ばとは思えない行動力と食欲?!初めて新幹線ホームでお会いした時は、空腹だった模様であまりご機嫌が良いとは言えませんでした。昼食を終えた途端私の目を見つめ、そして私の肩に手を置き命名。なんとラオーニの姪の名前をつけて下さいました!感激!お腹が満たされ笑顔に。ホームで出会った時とは全然違う!本当に正直に生きている!

生きていくという事は食べる事に繋がっている。当たり前の事を改めて感じた瞬間でした。ラオーニの食事の量にも圧倒され、その年齢に疑心暗鬼になるほど気持ち良く平らげていました!安易に食べ物が手に入る私達とは違い、だからこそ食物も大切に必要な分だけ頂く。大自然の恩恵を受け、生きとし生けるものと共存共栄…ではなく畏敬の念を持ち、生き、感謝し、祈る。普通にただ穏やかに、森と共に精霊と共に部族が暮らす事を望んでいるだけ。その普通の事が脅かされているから…。そしてその普通の事が、実は地球全体に影響する大きな事に繋がっている!と感じました。ブライリは、穏やかで優しいお茶目なインディオ。そしてもう一人、イケメンのベポー。彼は近い将来若きリーダーになると私は確信しています。毎回講演会の参加者全員と3人が温かいハグをし、ひとり一人の魂に何かが残ったと思うと、本当に嬉しいです。

「日本は、良い精霊に護られている!」と歩く神社ラオーニ氏は最後に言い残し静岡を後にしました。新幹線のホームに残された私はぽっかり穴が空いてしまい、涙が止まらなくなりました。この素晴らしい出愛に体験に研子さん始め、スタッフの皆様様に感謝致します。そして、色々なかたちでご賛同下さいました多くの皆様のお陰で静岡のイベントも無事に終える事ができました!さあ、ここからがスタートの静岡!今後共RFJしずおかをどうぞよろしくお願い致します!合掌。メイクムレイ。

